

郷土を知ろう

諏訪形の史跡めぐり



< 諏訪神社 >

平成9年（1997）12月

- 言葉遣いなどはできる限り原文を踏襲し、著者の執筆したとおりに再現を試みました。
- 印刷がつぶれていて読み取れない文字が若干ありました。
- 「何々は」と記述すべきところが「何々わ」となっていますが、そのままにしました。
- 「よ」「う」の文字が「ょ」「う」となっているものもそのままにしました。
- 出典として『中村御堂覚書帳』『諏訪神社文書』とありますが、これらの原本については不明です。
- 写真は挿入されていた場所に入れましたが、元版が不鮮明なためよくわからないものも多くなってしまいました。なお、サイズは変更しています。
- 図版はできるだけオリジナルに近いかたちで書き直したものを掲載しました。
- 「須川区の念仏経」は省略しました

目次（注：ページは底本のもので、この印刷物とは異なります）

諏訪形の史跡めぐり

- | | |
|---|--------|
| 1 諏訪神社 | 1～4頁 |
| 祭神、神社の変遷、祭日、境内社、文化財 | |
| 2 荒神参上神社 | 5～8頁 |
| 祭神、由来と変遷、災害と復興、祭日、境内社、文化財 | |
| 3 金窓寺 | 9～11頁 |
| 本尊、寺院の由緒、古笈、薬師堂 | |
| 4 堂村の郷蔵 | 12～13頁 |
| 5 諏訪形西山一帯の石祠調査 | 14～18頁 |
| 石尊社、権現社、飯綱社、大岩かげの石祠
権現社下方の石垣跡、地図 | |
| 6 庶民の信仰と伝説 | 19～28頁 |
| 高町のカンカン石、堂村の観音堂跡、中村のお堂跡
山の神信仰、須川の池伝説 | |
| 7 小菅訓導碑 | 29頁 |

遺跡からみた

諏訪形古代史のあらまし

- | | |
|----------------------|--------|
| 1 諏訪形に人が住みつく | 30頁 |
| 2 稲作のはじまり（弥生時代） | 31頁 |
| 3 古墳時代 | 31～34頁 |
| 古墳の出現、諏訪形の遺跡と古墳 | |
| 4 須波（すわ）郷における家族制度の推測 | 34～35頁 |
| 5 諏訪形の条理的遺跡 | 35～36頁 |

むすび

諏訪形の史跡めぐり

1 諏訪神社 諏訪形 字 宮田

祭神 建御名方富命

諏訪大社の分霊として往古よりこの地に鎮座し、その創建年次は詳らかでない。
嘉禎3年10月諏訪上社の分社として諏訪大明神と称した。

諏訪形の産土神で、この地域の産業発展と氏子の幸福を授け給ふ御神であり、その神威は高く、近隣・近郷にも崇敬者が多い。

諏訪神社本殿の奥に丸い石一個が安置されているという、この石がご神体であるとかきく。こんことは、上田市下之郷の生島足島神社の御神体は「土」であり、諏訪大社は「山」、本郷の諏訪社（泥宮）は稲を育ててくれる「泥」のように、古代の人々は生活に密着した自然界の諸々を信仰の対象にしたもので貴重な存在である。

また、諏訪神社の神紋は立ち梶の葉が用いられている。梶の木は山野に自生しているもので信州では神が宿るといふ、諏訪大社の神紋だけは「根有梶」といって三葉のもとに根がある。

神社の変遷

*文治6年（建久元年1190）諏訪神社文書によると社殿改築と明記されている。
したがって、この年以前に既にこの地に鎮座していたことは明らかで、その創建は平安時代にさかのぼることができる。

なぜこの地に、こんなに古くからの明神宮が創建鎮座していたのか。
上田市下之郷に生島足島神社がある。その一族は大和朝廷から派遣されこの地の国造（くにのみやつこ）となり、宮中に奉祀されていた生島・足島の神を分神させたという相当の権力者がいたことである。諏訪様がこの地に入ってきた時は生島様がこの地に鎮座しており、したがって諏訪の一族は生島様に従うという記録が神事として残っている。

生島足島神社の斜め向き合いに諏訪社があり毎年11月3日に「おこもり神事」といって、諏訪社が南の生島足島神社太鼓橋でお移りになり「おこもり殿」で炊いた「おかゆ」をお供えするという行事がある。それは何を物語るかといえば、諏訪の一族が入った時は既に生島様の一族（安曾氏）がいたことを物語っている。

それが時代が過ぎて武士の世の中になると生島の勢力が衰え、諏訪の一族がだんだん強くなり近郷にも及ぶようになった。そして諏訪の一族は、政治的にも文化的にも由緒あるこの諏訪形を選んで明神宮をお迎えし、村のまとまりのために産土神として祭ったのでわなかろうか。（元城下小学校長 石川好一氏講演より）

*嘉禎3年（1237）、諏訪上社の分社として諏訪大明神と呼称する。

*宝永3年（1706）、諏訪形明神宮は仙石時代から社領貳貫貳百八拾文を拝領していた。壱貫は約500坪、石高2石4斗7升、計5石6斗3升の扶値米を受けた。因に、小牧村の住吉大神宮、御所村の神明宮はいずれも参百文であった。

*享保9年（1724）、社殿改築。

*明治6年（1873）、村社に列する。

*明治17年（1884）、諏訪神社と改称する。

*明治29年（1893）、神田7反有余歩の神社有を許可される。明治維新時に社領を上池したので再び社有地の許可を得る。大正年間この小作米は、7石5斗で価額は266円67銭であった。なお、この収納米を用いて濁酒をつくり祭礼者にふるまったという。

*明治45年（1912）、「須川鎮座諏訪社、社寺合併規則ニヨリ村社諏訪神社境内ニ移ス」とある。（中村御黨覚書帳）

*大正2年（1913）9月城下村、村社諏訪神社は神饌幣帛料供進神社として県より指定される。これによって供進料は村費から支出され、村吏員が参詣するように定められている。

*大正11年（1922）、新築改築なって現在の社殿となる。同年の秋の例祭「9月27日諏訪神社拝殿改築す、大々的の祭典執行す」（中村御黨覚書帳）

- 「諏訪神社文書」とは何か不明
- 棟札の研究では最古のものは嘉禎3年（1237年）とされており、この記載によるとさらに古い記録があることになる

*昭和21年(1922)、宗教法人となる。終戦となるや、直ちにマッカーサー指令によって神社仏閣はすべて行政からはなれ法人となる。諏訪形では、東組・中組(諏訪形)西組(中村)須川そして朝日ヶ丘が加わって、それぞれから総代及び委員が選ばれて、自主的に管理運営をしている。

・「1922年」は「1946年」の誤り

*昭和22年(1947)、農地改革法令により、神社保有農地を耕作者に解放する。

*平成2年(1990)、御大典記念行事として石造りの狛犬・常夜灯などの寄進を受け境内を整備した。

祭日

○4月29日 春祭 ○9月27日 秋祭(神饌幣帛料供進む)
○12月31日 大祓年越祭

戦前までの秋の例祭には相撲大会や、その他催物・出店などあって賑いをみせたが戦後は時代とともにすべて簡略化されている。しかし12月31日の年越しから元旦にかけての2年参りの参詣者は比較的多く、役員は徹夜で焚火をしながら参詣者に祝酒を振る舞い新年の挨拶をかわすのが、今でも慣例となっている。

とくに元旦の初日の出7時10分頃、東の山並みは茜色に染まり、やがて真赤な太陽が参道や鳥居・社殿を照らす描写は神秘的である。

境内社

*天満宮 表山門右側の地に台石の上に石祠として鎮座、小さな鳥居を要していたが昭和の初期ごろ現在の社屋に遷座する。

*蚕影社 その昔は荒神宮境内にあったが、故あって東山尾根上に移す。
明治44年(1911)「蚕影社八旧宇東山鎮座アリシカ社寺合併規則ニヨリ諏訪神社社境内二移」とある(中村御堂覚書帳)

*石祠 社殿左側に二基の石祠がある。これは中村地区の管理する秋葉神社で、江戸時代後期頃大火にあい、ために防火と無難息災を祈念してお迎えしたのだという。その中の一基に、文政2年卯年(1819)と刻字されている。
戦前までは毎月23日にお日待をしたが、現在は2月23日だけとなっている。

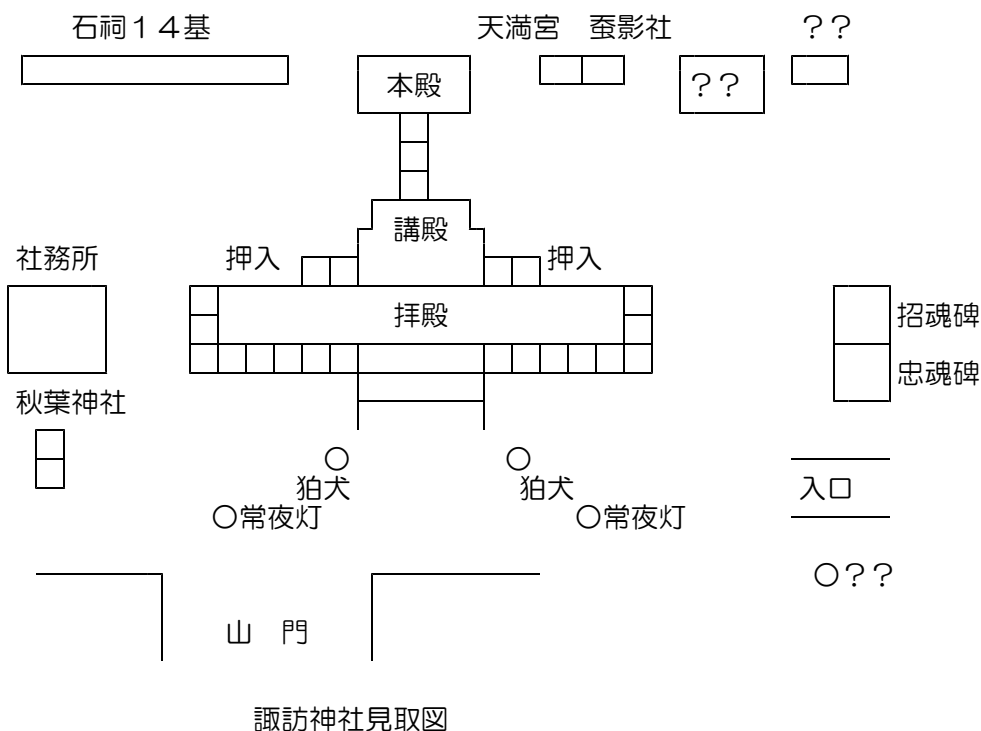
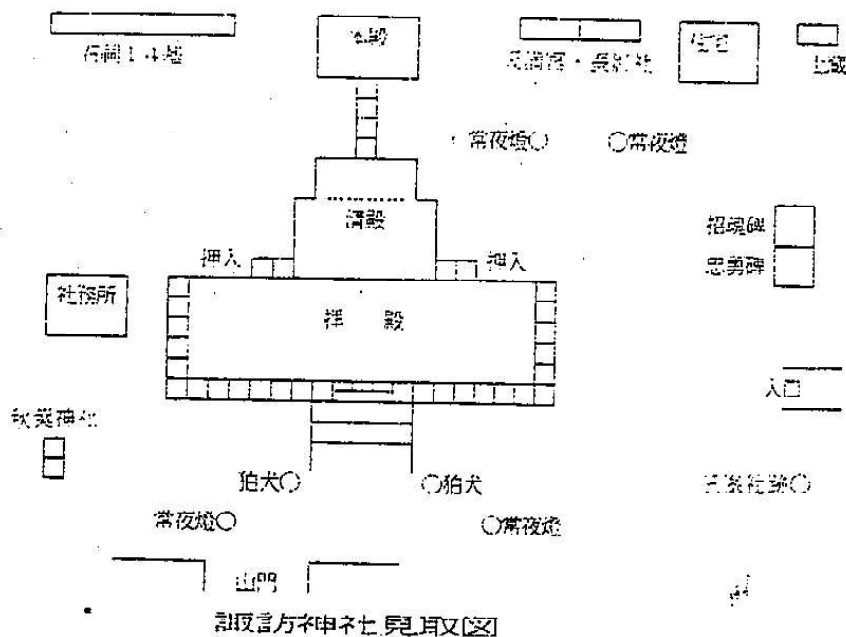
*大正5年(1916)「三峯神社は従前は同村腰巻の丘上に安置たりしが講員協議の上6月、村社諏訪神社境内に移す」と記されている(中村御堂覚書帳)
この三峯神社は、諏訪神社の遊園地東側に2m近い石柱の上に安置されていたが、木祠のため朽ちてしまい現在はその石柱だけが残っている。

さらに、本殿左側隅の空き地に14基の石祠が整列されている。そのほとんどが無記名であるが、寛政・文政年中と施主名の刻字の祠が若干みられる。このように、この時代は神に対する庶民の信仰が厚く、講中の代参および個人の本宮参詣によって勧請し天災や方策を祈念して山野に、また家内安全や子孫繁栄のため氏神として屋敷内に石祠を造り祀ったもので、明治維新以後これ等散在していた石祠を代表神社に集め合祀したのでわなかろうか。

文化財

*忠死碑 明治29年4月 城下村有志者建之
日清戦争戦没者(明治27・8年) 陸軍憲兵一等軍曹 柳沢 国吉
陸軍輜重輸卒 横関嘉三郎

*招魂碑 昭和28年8月15日 上田市城下地区協議会建之
日露戦争・満州事変・志那事変・太平洋戦争などの尊い犠牲者150有余名の英霊が刻字されている。
日露戦争従軍者調 城下村(小牧・諏訪形・三好町・御所・中之条)
将校3、準士官2、下士官16、兵卒67、計88名。うち、戦死者3 戦病死3 負傷者8、病者10となっている(加々井正一氏保存資料)



• 3ヶ所読解不能

2 荒神宮 参上神社 諏訪形 字 高町

祭神 建速須佐乃雄命
興津比古命 ・ 興津比売命

当社の祭神は天照大神の弟神にして、武勇を尊びその神威は世の騒がしさを静め、平和と幸福を招く教えを授け給ふた。
比古・比売神は、生活のもと火食の法を示し、火鎮と各家の「かまど」の守護の御徳を現し、子孫繁栄と生活を司る大神である。

由来と変遷

本社創建は不詳であるが、治承4年（1180）9月、木曾義仲が平家追討のため依田の里に兵を挙げたとき、木曾に住む中原兼遠（義仲の義父）は一族を引具してこれに応じ、その出陣のときその子今井兼人豊成に荒神像を託して、義仲の守護と一門の武運を祈らしめた。

義仲没後建久年中（1190～1198）中原兼遠の女（むすめ）巴御前（義仲側室・女武将）が尼となって当社に来たり、潜居の人々に会い出陣以来の始末を物語り、改めて社を造って荒神宮を祀ったという伝承がある。

世の遷移に伴ない栄枯盛衰を重ねつつも、徳川の治世となって代々の上田城主（真田・仙石・松平）も信仰篤く寄進奉賽あり、また世人の信仰も深く多く、ことに治承年間（1177～1180）義仲の父源義賢の居住地でもあり支配地でもあった縁故のよって上野国（群馬県）多野郡吉井町字多胡を中心に甘楽町・桐生・高崎・富岡、そして江戸・北関東、更には義仲が育った木曾地方などに講中崇敬者が多かった。

明治大正時代には高位高官等の参拝賛助、鷹司氏の大的のぼり奉納など県内外にわたって参拝者多く社頭は賑わった。また大正11年（1922）10月神宮奉祭会長、藤岡好吉氏が祭主となって東大名譽教授、寛（カケヒ）克彦氏により御祭神の天上に参上りの神事によって『参上』の宮の称奉って、荒神宮参上神社と命名する。

昭和の大戦中は出征軍人家族の参拝者多く、当宮は「一万度祓」の行事を斉行し、出征軍人の武運長久と家族の安全祈願を行い続けた。

当宮は、この広大無辺の神恩に報ゆるため、現在三十一代神官今井正昭氏他一族が奉仕し、賛助会員による荒神宮保存会を結成して、その護持に努めている。

・今井正昭さんは現神主
貴美さんの父

付言『今井氏は城下村小牧に拠る。長享2年（1488）諏訪神社花会の明年御頭定に上田庄御符礼五貫六百六十にて候を是へ三貫三百勤足持来候、使弥二郎代官今井重春同小宮山幸広云々「御符礼之古書」とあるは、これにや、戦国の世に小牧村西方に井伊賀の守居る。寛永年間郡絵図』

（小県郡史 第六編 第三章 氏族の藩えんの記事）

・「藩えん」は意味不明

災害と復興

*永正4年（1507）8月、千曲川の大洪水により須波郷（小牧・諏訪形・御所・中之条・下之条・諏訪部）は家屋田畑の流失多く、荒神宮も流失したと記録されている。

*享保6年（1721）9月荒神宮再建。

*寛保2年（1742）8月、千曲川の大満水洪水にて、荒神宮流失する。

「諏訪形の被害は家屋5戸流失、32戸砂入、田畑砂入」とある。
この年の干支をとって戌の大満水といわれ、上田領全体として流失家屋671戸、砂入家屋574戸、流死人158人に及んだという。（上田小県誌）
この時の流死人をあつめ、秋和村正福寺に石碑を建て供養した。これを千人塚と呼んでいる。

*文化8年（1811）2月、諏訪形の若宮高町の大火により荒神宮の一切と付近の人家20戸全焼。

「2月晦日、三方荒神の茶室より出火茶室不残、荒神拝殿本殿かき数17軒？棟数47軒焼失いたし候」（中村御黨覚書帳）

・「？」は原文のまま
・文化8年の火災について火元は荒神宮の茶室だったことがわかる

*文政2年（1819）6月、仮拝殿竣工（屋根瓦の銘）

*安政4年（1863）、現本殿再三建に着工

*文久3年（1863）3月15日竣工遷座祭執行、大工棟梁竹内八十吉。

月余にわたる盛大な祝祭のため、付近の農家はにわかに参詣宿となったので上田宿の旅籠組合より無許可営業であると藩の役所へ訴えたという。

*昭和27年（1952）3月拝殿と附属建物の改築に着手、その用材は旧御料林の木曾桧材を使用。

*昭和28年（1953）10月造営竣工。

これら各年次の新築・改築資金は、地元区内は勿論上田市とその近郷、県内外の篤信家及び荒神議員等六百余名の浄財寄進による。その寄進者御芳名は本宮内に納め永代保存し、かつ境内に3基の奉賛記念碑などを建立している。

祭日

○1月 1日	歳旦祭	○ 7月15日	祇園夏越祭
○1月15日	御幣講祭	○10月15日	保存会講祭
○2月節分日	節分ついな祭	○11月 1日	新穀祭
○2月甲子日	甲子七福祭	○12月31日	大祓と年越祭
○4月10日	春季祭と御幣祭（陰暦3月15日）		

明治2年（1869）「3月13日より19日まで三方大荒神開帳中、然る処開帳中芝居有之吉田村、福田村より大神楽、鉄砲行列にて大賑い外、見せもの曲場沢山」（中村御黨覚書帳）

境内社

* 大國主社・七福神・稻荷社二社・神竈石（彦根さま）

* 石祠九基（熊野皇大神・宇佐八幡宮・天満宮・明神宮・その他不明）

明治維新以後、講中または個人で祀っていた氏神をこの境内に遷し奉祀したものであろう。

文化財

* 荒神宮本殿 上田市指定 昭和43年4月25日指定

中国の唐様彫刻を多用し、構造の独創性もあって彫技の優秀性が評価されている。江戸末期に活躍した上田常入大工棟梁、竹内八十吉の作である。八十吉は諏訪の柳川流を汲む棟梁で、彫技に優れ造作も多いが本社のような力作は少ない。

* 石造五輪塔 上田市指定 昭和59年4月9日指定

総高111.5cm、大輪が笠のように大きくなり、上部の風輪が飾のように小さくなり、地・水・火・風・空の各部が同格であり、五輪塔の意義を明確に表現して五輪塔の基本型を示す鎌倉時代の代表的な形式である。風空輪の石質の異なる点は惜しまれるが、或いわ室町時代も早い頃のものかもしれない。

* 櫟の樹林 上田市樹種保存林指定 昭和50年3月1日指定

本数8本、胴廻り約4m、樹齢凡500～600年（室町時代）か、境内に散在しており、火災で焼跡らしき樹木も見受けられる。

* 絵馬

奉納絵馬数100枚、金のわらじ、塩の道の絵馬、その他

* 天酉回翁句碑・海善亀明句碑 文久元年（1861）建碑

回翁句 すわがたに、かみのみよにか、すさのをの、
すさかによみの、みかにたがわす 回文
回翁は更級郡若宮の出身で、この界隈の俳諧指導者でわなかったろうか。

亀明句 なられみす、のどかさかとの、すみれかな 回文
（流れ見す、長閑さかとの、すみれかな）

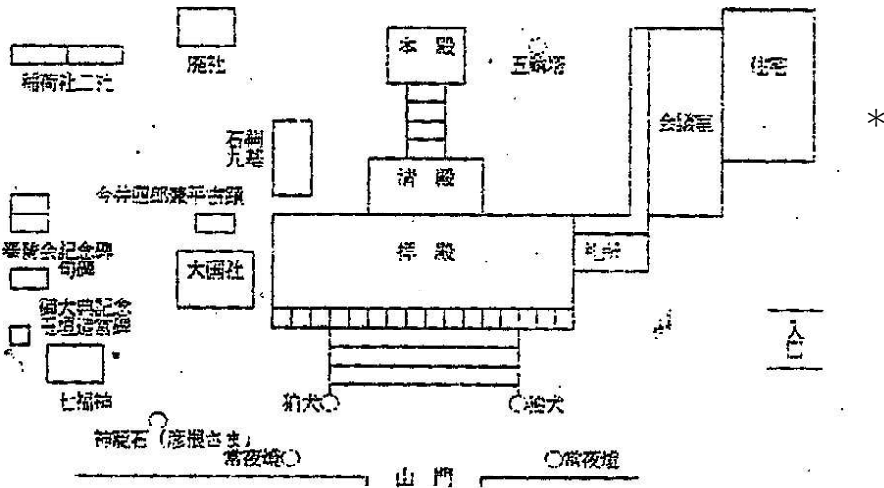
廻文碑右側面にあり、海善亀明（1810～1881）は上田市新田海善寺の一六世住職。俗姓矢島、法号を俊雅といい、俳号は寿考庵である。この回文は「上から読んでも下から読んでも同形の文」である。亀明は回翁とともにこの地方の指導者であった。

碑建立者 俳句愛好家 諏訪形宮下理兵衛他五名

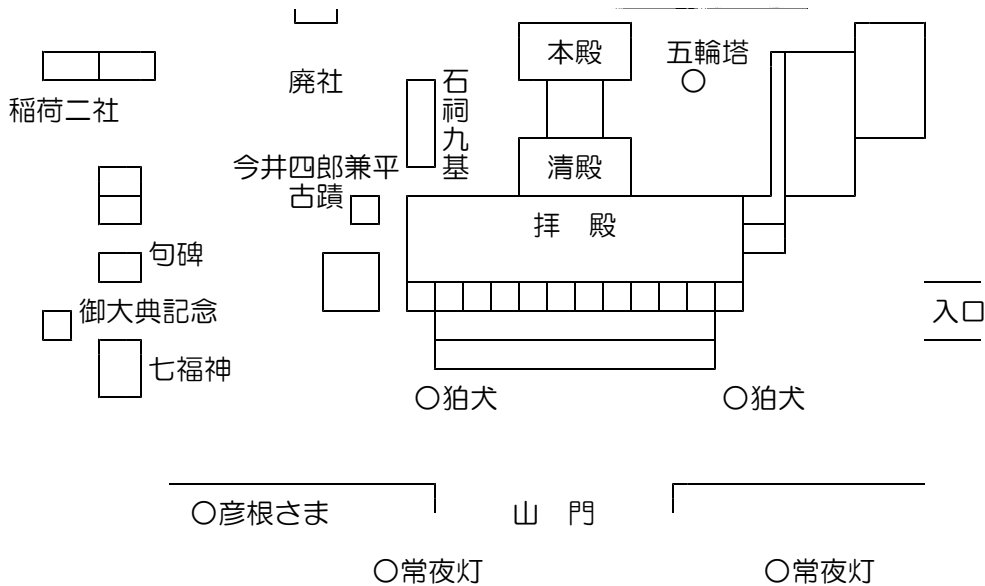
* 中原四郎兼平史跡碑

中原四郎兼平は木曾義仲の股肱の臣で、義仲が栗津で敗死したとき、最後を見届け、自らも討死した武将である。

義仲の木曾の養父中原兼遠の二男、巴御前の兄にあたる。



荒神宮見取図



荒神宮見取図

• 図中の「石祠九基」は現在は西側（稲荷二社の南側）に移されている

• 釈迦如来は阿弥陀如来の誤り
• 東部町は現東御市

3金窓寺 諏訪形 字 砂留 1524番地

本尊 釈迦如来 曹洞宗（大源派） 東部町本海野興福寺末寺

寺院の由来

開基は甲州武田公の末孫（姓名不詳）の一女にして、慶長元丙申年（1596）3月8日武田家先祖菩提のため一字を建立し、興福寺第七世通山全達大和尚を開山に拝請し、玉祐山金窓寺と称す。のちに自らも出家し法号を玉窓妙金法尼と称し、晩年は西山庵に蟄居していたと伝えられ、慶長18年（1613）11月27日に歿している。なお、武田公の遺物『古笈』は寺宝として現存している。

法尼が歿してから百有余年経過した、享保17年（1732）9月、金窓寺第六代祖門曇庭和尚が西山庵の地に供養のため、石祠の権現社を勧請奉祀している。その石祠のそばに直径70cm位の大きな「かえで」が祠をつつむかのように繁っているのも、何か当時のおもかげを偲ばせる（権現社の項参照）。

宝永3年（1706）諏訪形村差出帳によると、上田藩仙石氏統治時代に寺領貳貫参拾文（石換算、五石一升四合）を藩から受けている。因みに近隣の小牧村大福寺、御所村祥雲寺はいずれも五百文であり、金窓寺はかなり優遇されていたことがわかる。

金窓寺創建当時は諏訪形地区の中央堂村708番地にあったが、明和年中（1764～1771）火災のため寺が全焼し、現在の字砂留の地に再建することとなった。

第六代祖門
曇庭和尚

• 2025年秋に藤原慎康さんが住職となる予定

この堂村の旧寺跡378坪は昭和22年の農地改革により耕作者に解放となる。

先代尚武住職は上小地区の司法保護司として、国の委託を受け刑期の終わった若者を衆寮に預かり、社会復帰の修行伝導をしたという。住職50年有余年昭和49年3月歿、現在21世広生代に至る。

明治5年の檀家数126戸であったが、現在200有余戸

古笈
この古笈は縦84cm、横64.5cm、奥行28cmでかなり大きなもので、その中央の観音開きの中には、観世音菩薩を中心に動物（像と？）と2対の仏像が座している。中は金箔で色褪せているが、当時は華麗なものであったと思われる。

笈とは、行脚僧・修験者などが仏具や衣類、食器などを入れて背に負う箱のことで金窓寺の古笈は貴重な宝物でわあるが、その役割は判然としない。

*古笈を入れた木箱の墨書 平成5年7月25日 小池記（●は字体不明）

古笈一箇者信濃国小県郡諏訪形村
金窓寺之所什而其例寄世俗●●●
最為壯麗●按之乖五百年前之物也
寺伝云此境係干天文中上田原之戦
之街因以為機山武田公遺物聞●部
其故予今熟視其何謂木背有記文回

伯州之住宏覺井押出字見焉然而紀年
漫滅只四月廿五日之字隱●但存己
実可惜也 其餘孟浪無得可読又再按
後人凶女所為塗沫●予功德向來愈久
破碎更修造外厨以寄之云上●
一片老婆心身炎

為百合主人
原 昌吉 講
(この9文字は異筆)

維時文久2年歲次壬戌孟夏吉祥日
城東 原街 成沢 寛經
権現山金窓禪寺 現住祖門代

*墨書解説 筆者が解読したもので凡そこんな意味でわないかと思う。
『古笈一箇信濃国小県郡諏訪形村金窓寺の什なり、世俗にはその例がなく最も壯麗で五百年前の物也と寺伝は云う。天文中上田原之合戦の衛の為の機山武田公の遺物と聞く其れ故私今其のなんであるかを塾視するに、木背に記文あり伯州に住んでいる宏覺並びに押出字が見えるが、然し紀年漫滅ただ四月廿五日の字隠れあり実に惜しいことである。其の他孟老可読出来ず又後人の為にも塗沫をして、これからも功德向來久しいので破碎箇所外厨の修造を上に乗せ申す、一片老婆心ながら』

これは文久2年（1862）城東原町に住む成沢寛經氏が、金窓寺第15世祖門和尚に書き送ったものである。

• ここで言う薬師如来像の存在が確認されていない

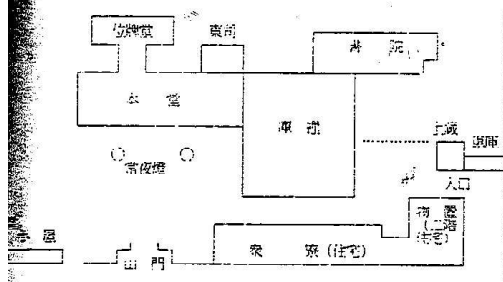
薬師堂

名称	用途	構造	坪数	現況
本 堂	法要儀式	草葺平屋	54.25	トタン葺
庫 裡	住職居住 檀家集会	// 瓦葺平屋	67.75	//
衆 僚	参禅修行場	//	33.00	住宅に改造
土 蔵			6.00	
東 司	用便の裏門	//	9.00	
物 置		草葺平屋	8.10	住宅に改造
薪小屋		//	10.00	トタン葺

たため仏像は本堂に移す。この薬師如来は高さ51cm、底幅15cmの木像で両手が欠けている。



金窓寺

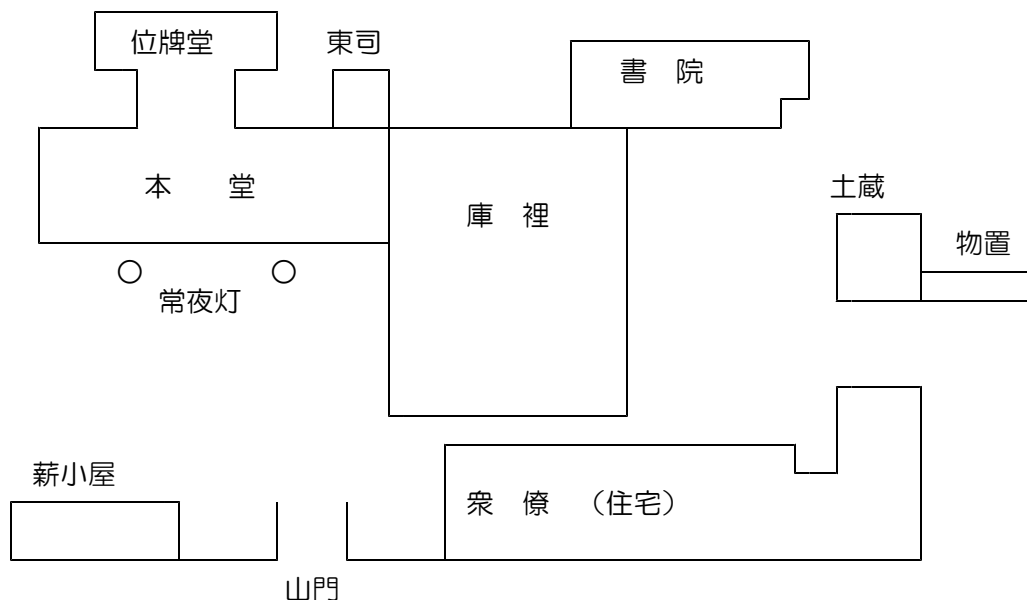
古たし笈
(伊)

金窓寺見取図



葉師如来像

総建坪188坪1合であるが、その後諸堂改修・山門再建・書院及び位牌堂新築、住宅改造を行い整備されている。



4堂村の郷蔵 諏訪形 字 堂村 712番地 148坪

上田藩仙石統治時代、諏訪形に3軒の郷蔵が造られていた。そのうち大字諏訪形字堂村の郷蔵は確認されたが、のこり2軒はその所在が不明である。地域的なことを考えれば須川に1軒、中村に1軒と当時造られたのでわないと思われるが、これはあくまでも推測である。

現存する堂村の郷蔵は当時の様相とは全く異なり、屋根は瓦葺、柱及びヒサシは土壁で覆われ外観木部はみられずそのうえ白壁で塗られ、あたかも豪農・豪商の蔵様式で、いつ建て替えられたかわ不明である。規模は南北横4間半、東西2間と当初の建坪より小さくなっている。

明治維新以後郷蔵としての機能は失われ、明治12年ごろ諏訪形村の戸長役場の事務所に利用されたとか、また昭和12年現在の集会場が新築されるまで、村の集会場として利用されていたという。

・現在は建物は存在せず、諏訪形まちづくり協議会による郷蔵跡の案内板のみがある

・現在の諏訪形公民館ではなく一世代前のもの

*宝永3年(1706)「諏訪形村差出帳」に次のように記されている。

1 郷蔵	3 軒	萱葺					
内	1、	長サ	6間	横2間	但三百文、御高之内二而御引地		
内	1、	長サ	6間	横2間	郷普請、材木御地頭様カラ被下候		
内	1、	長サ	7間	横2間			

つまり「郷蔵3軒はいずれも萱葺きで、内3軒の大きさをそれぞれ示し、但し書きで三百文は村の生産買高から引地する(敷地料は面租地とするの意)郷蔵普請のときは殿様から材木を無料で支給する」

このことから、仙石氏が上田藩主となってから藩の命令によって各村々に造らせたいわゆる御蔵詰米を収納した蔵のことである。この御蔵詰米は藩の必要に応じて出庫したものであろうか。ときには災害時の救援米としての役割もはたしていた。

*御蔵詰米「上田小県誌」によると、農民から出された貢納米は大別して次の7通りに処分されていたことが記されている。

- (1) 上州御出来(買継米共)及び駄賃米…上州松井田まで回送した米及びその運賃米、江戸詰め藩主ならびに家族の消費、給与に当てられた米のこと、御城米ともいうこの米のうち、貨幣に換えて納める部分があったがそれを買継米といった
- (2) 御膳米…藩主の藩邸の食用に当てられるもので、特別に精選したもの。
- (3) 御蔵詰…郷蔵に収納される米のこと
- (4) 金納…貨幣にして納めるべき米
- (5) 庄屋給…庄屋に与える給与
- (6) 人夫扶持…公用の人足に対する扶持米のこと
- (7) その他

御蔵詰の米(3)は二重俵とし掛縄も一定の方式が示されて極めて厳重であった。さらに「御蔵納・何組何村・米主名」を中札・表札にそれぞれ記入して、郷蔵に積み込んだのである。

また、このとき藩に証文を出している。すなわち米は確かに郷蔵に預かったということ、いつでも御用次第お役に立てるということ、もし大事盗難にあったら村中で弁済するとい
うことなどを誓約させられている。



堂村の郷蔵

5 諏訪形西山一帯の石祠調査

平成5年5月26日

調査者 金子良夫・窪田為男・小出公尊・小池●夫・柳沢英男

一石尊山(三本松)の雨降社

- ・標高706、8メートルの石尊山(三本松)の頂上に祀られている。東向き。
- ・頂上の広さ東西11メートル南北10メートルほど。北側は急崖となっているが、眺望がよく眼下に諏訪形の集落、千曲川をへだてて上田市街を一望できる。南側

・「東山」ではなく「西山」と呼んでいる。諏訪形から見て「東山」の呼称は明らかに違和感があるので、もともと「西山」なのかも知れない

に舟窪よりの登り道がある。

- 石祠の北側に「雨降神社往昔子此山二鎮座、本殿木造、雨風二朽故御祠再建ス」南側に「明治11年2月村中」と刻まれている。
- 明治14年(1881)の村誌「長野県町村誌東信版」には「石尊山高さ五十四丈、周囲十八町、村の南にあり、樹木なし、登路一本字東山より上る二十五町ばかり、険路なり」「雨降社神社字西山にあり、祭神大山祇命、創建年月不詳、祭日8月27日」と記されている。
- こどもの頃(昭和10年ごろ)村人が、この山に麦わらをかつぎ上げ、蓑笠をまとして火を焚き、雨乞したことを覚えている。
また、城下小学校では終戦以前には、陸軍記念日(3月10日)の日、毎年全校生徒がこの山に登り、校長先生の音頭で、天皇陛下の万歳三唱をした。

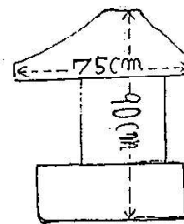
(地元古老談)

・石尊社について

「神奈川県中央部、丹沢山地の南東部にそびえる山を大山といい、標高1246メートル、相模平野に突起しているの、山頂のながめは房総半島・富士山・箱根・伊豆一帯におよび、海上からもよい目標とされる雨降山(あふりさん)ともいい、山頂に大山阿夫神社の奥院、山麓に大山寺があり、古来修験道の道場として知られていた。今は関東・東海地方の農神・産業神としての信仰が厚い。白衣姿の登山者も目につく。ふもとの大山川の谷沿えに●●たちの家がならぶ。門前町大山社阿夫利神社の三の鳥居からはじまり、宿坊の外、みやがもの店、飲食店が軒をつらねている。西ろくの秦野から入る養毛にも●●の宿坊がある(平凡社百科事典)とのことで、江戸時代石尊講(大山講ともいわれる)が各地につくられ、講員が参詣したわけである。」

宝永3年(1706)の「上田藩村明細帳」に石尊社が一つも記されていないことは、諏訪形の場合も、この年代以降の●●と思われる。

このような石尊様は一般には、山の神と考えられたり、雨降社(あふりしゃ)という早魃のとき、雨を降らせてくれる神として信仰された。4月から5月農事の始まる頃に、石尊様の祭りをしたり、田植えがすみ、田の草とりも終わり、稲の穂が出る頃、御本社へ代参をたてて参詣に出掛けたものであろう。



- 三本松のある地籍を「字西山」と呼んでいる

二権現社

- 権現山の北麓で、標高657メートルの尾根の東側をわずかに下った、ふところ状の平地に東向きに祀られている。金窓寺持ちの石祠である。
- 石祠の北面には「金窓寺六代祖門 造立」南面には「享保十七年九月吉日」と刻まれている。(享保17年は1733年)
- 石祠の北側には「かえでの古木」が立っている。目どおり直径70センチメートル、周囲2メートル。
- 寺伝によると、この場所は武田信玄の妹が尼となって、庵をむすんだ場所と伝えられている。
- 石祠西側の尾根上(標高657メートル)からの眺望がよい。中之条・下之条・岩鼻方面、上田原、小泉、青木方面など一望。ここから諏訪形は見えない。遠く日本アルプスも望める。

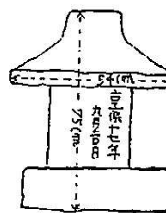
・権現について

神号の一つ。権現は権(かり)に現れるという意味。仏・菩薩が衆生を救うため「かり」の姿をとって現れること。また現れた神のこと。本地垂迹(ほんじすいじゃく)の説から出たものである。

文献上古いものとしては、弘仁3年(812)伊豆国の「走湯山権現」がある。そのほか寛弘元年(1004)大江匠衡願文の「熱田権現」、永暦元年(1160)百練抄に記された「熊野権現」など。この頃よりしだいに熊野三所権現・白山権現・山王権現・春日権現などと呼ばれるようになり、江戸時代には天海僧正が朝廷に奏上して、家康に東照大権現の号を賜っている。

(河出書房の日本歴史辞典・小学館の日本国語大辞典)

- 祠と尾根上で標高が同じ657mは矛盾している



三飯綱社

- 飯綱山から北へ下る尾根に、中部電力の送電線の鉄塔が立っている。その鉄塔を尾根伝いにおよそ100メートル下った尾根先の、岩の上に祀られている。石祠で南向きにたてられている。
- 石祠の側面に刻まれた文字、風化して読み取れない。
- 江戸時代の宝永3年（1706）の諏訪形村差出帳には「一、飯綱社」と記されている。明治14年（1881）に諏訪形村の戸長から、長野県令宛てに提出した『諏訪形村誌』には記載されていない。
- 飯綱信仰について
飯綱信仰の本山格の社は、長野市・戸隠村・牟礼村の境にある飯綱山（飯縄山とも書く）の山頂に祀られている。飯綱神社・飯綱権現・飯綱大明神（飯縄とも書く）などとよばれている。

- 市町村合併で名称は変更されている

飯綱信仰は飯綱使いと称される修験者・行者たちの信仰が特徴的であり、中部地方から東北地方にかけて、濃密に伝承されている。また飯綱信仰の普及については、関東・中部をはじめ各地に、講を結成させた戸隠修験の、布教によるところが大きい。（飯縄山の飯綱権現には里宮が、長野市芋井の荒安と戸隠村にあって、ここが信仰の中心で、里宮は千日大夫と呼ばれた仁科氏が奉仕した）

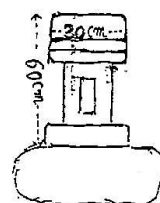
飯綱権現の神体は通例狐に乗った烏天狗であるが、この信仰は、農民が農業の守護神として信仰するというよりも、修験者たちが、飯綱の法を修するために、飯綱権現をまつという傾向が強いと考えられている。（平凡社の日本史大辞典）

宝永3年（1706）の村差出明細帳に、山伏（修験者）が小牧村に2人、諏訪形に2人と記されている。

四大岩かげの石祠

飯綱山から北へ下る尾根に、中部電力の送電線の鉄塔が立っている。そこから西側へ100メートルほど下った窪地に、東向きに大岩が立っている。この大岩の前に石祠が祀られている。

稲荷社ではないかとも言われるが、祭神は不明。



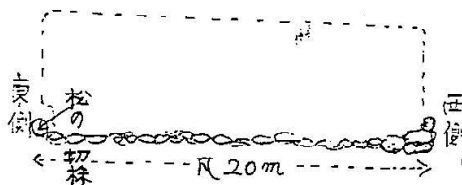
五権現社下方の石垣跡

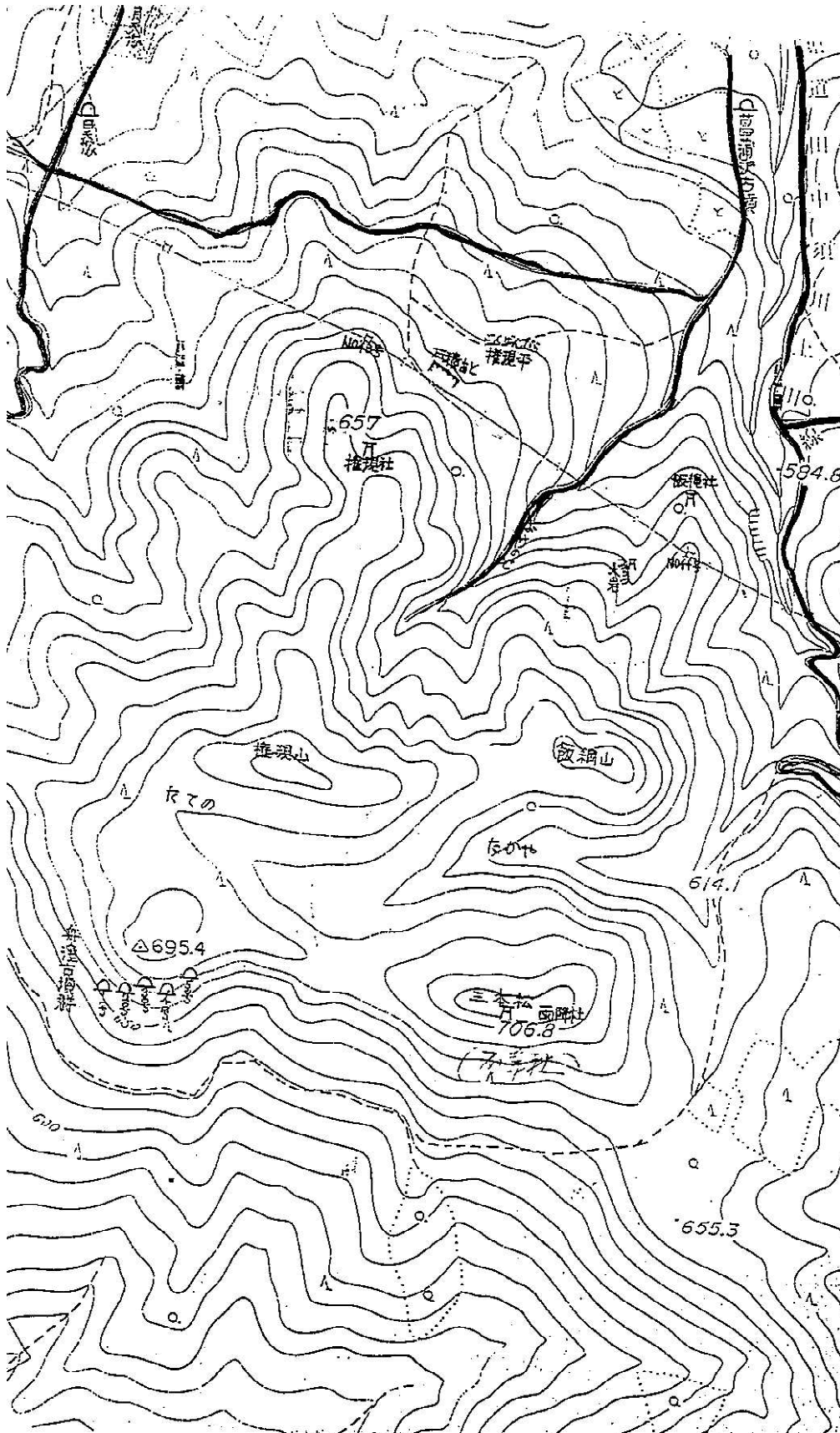
権現社からおよそ150メートル下った雑木林の中に、西側の隅が写真のような石垣が残っている。

石垣はだいたい一列で、西側の隅から東側の隅まで20メートルほどである。

北側は、木立で諏訪形の集落は見えないが、千曲川の向こうに上田の市街地、その先に神科台地・真田方面、さらに烏帽子岳・四阿山を望める。

かつて庵でも建てられていたものか、伝承不明である。





- この「諏訪形西山一帯」の石祠と古墳」と題された地図は舟窪古墳群の位置が違っている。飯綱山と記されたピークは三本松で、三本松と記されたピークは東山である。また、舟窪古墳群への道も間違っているなど、誤りが多い。

6 庶民の信仰と伝承

高町のカンカン石 諏訪形 字 高町

諏訪形部落の東端高町地籍に、扁平で楕円形の高さ150cm位の自然石に、高名な念仏僧であった徳本上人の「南無阿弥陀仏」と書いた名号を刻んだ石碑がある。この石碑を小石で叩くと「カンカン」と音がすることから「高町のカンカン石」と村人は呼んでいる。

文化14丁丑（1817）4月7日に建立されたもので、願主西心、村中と銘記されていることからすれば、村の人々はこの名号を石に刻んで建て、尼僧西心を中心に念仏行事を行ったものであろう。

徳本上人は紀州日高郡で宝暦8年（1858）に生まれ、文政元年（1818）60才で死去している。27才で出家し念仏専修に入り、増上寺の典海に招かれて江戸に入り念仏行者として東国各地を巡化し、一般民衆をはじめ藩公・大奥にまで念仏信仰をひろめその名は全国的にも高くなった。

徳本は文化13年（1816）4月3日上田城下町（市内大門町）の浄土宗願行寺に入って3日間滞在し、歌などをまじえてたくみに念仏成仏の理を説いたので、その法話を聞き念仏を専修しようとする人々が参集し異常なほど盛況であったという。その際小型の名号札2万1千枚を参集者に配布したということからみても、その盛況ぶりがうかがいしれる。なお、唐紙全紙大の大きな名号を結成された講中には配布した。

「徳本行者諸国名号石記」によると、信州には文化13年から同14年にかけて181基が建碑され、その後もあいついで建てられ300基にも及んでいるという。この近在でも次のとおり建碑されている。

○上田原合戦の戦死者の供養碑	常樂寺	下之条上組	文化14年建立
○上田原合戦の戦死者の供養碑	観音寺	上田原塚原	文化13年建立
○南無阿弥陀仏 徳本○	願行寺	市内大門町	文化13年建立
○南無阿弥陀仏 徳本		諏訪形高町	文化14年建立

- ・上田市の徳本上人名号碑について詳細は『諏訪形誌Web版』参照
- ・上田市内では12基の徳本上人名号碑が確認されています

*西心ー「カンカン石」付近に尼堂があったと言い伝えられている。してみれば各地の名号碑は寺・堂の境内に建てられている。このことから西心はこの尼堂の堂主であったのではなかろうか。そして村の人々に念仏信仰をひろめたであろう。

1. 道心一人（百姓からの修行者 13～15才位） 了心
と記録されているが、これより約百年も経過している西心と何か因果関係があったのでわなかろうか。

- ・『宝永の差出帳』からの引用と思われる



高町のカンカン石

堂村の観音堂跡 諏訪形 字 堂村 696番地 44坪

諏訪形集落の中央字堂村に、無檀無住のお堂に観音菩薩の仏像が安置され村で管理されていた。

明治6年（1873）廃寺・廃堂令によりお堂は廃止となり、仏像は金窓寺に移されたというが、寺にある仏像は薬師如来（小池先生の鑑定）で寺の薬師堂から移されたものである。したがって堂村の観音仏像は今のところ所在は明らかでない。

明治8年「同年事故ヲ以テ亮功学校ヨリ分離一村ニテ設立諏訪形学校（知仁学校トモ称シ字堂村696番地観音堂跡地に開校）ト称ス、校長八日下部寛氏ナリ。其後年（明治10年）小牧村モ亦分離小牧諏訪形合併諏訪形字若宮二新校舎設立若宮学校ト言フ」と記録されている。（中村御黨覚書帳）

その後の利用は定かではないが、大正13年2月現在の土地調べでは既に個人の所有となっており、現在は住宅が新築されている。その敷地内に当時のものと思われる切石で囲まれた90cm真角の井戸が存在している。

中村のお堂跡 諏訪形 字 中村 1148番地 146坪

上田市立第四中学校の敷地が諏訪形字堂前である。堂前と言うからにはその奥になにかがあっての堂の前の田圃であったことが想像される。

はたせるかな、道をはさんで字中村1148番地がお堂の跡地であった。しかし、大正13年2月現在の土地所有者調べで既に個人の所有畑地となっており、現在は住宅地となり、昔の痕跡はどこにも見当たらない。

敷地内には昔の葬式のときの「まわり場」があったという。また、年代不詳であるが無宿者の失火によって堂屋を始め仏像など一切を焼失してしまったという伝承がのこっている。

お堂のすぐ裏（1149番地）に墓地がある。その墓地内には現代風の角形墓石が整然と建立されているが、その片隅に小型五輪塔（鎌倉時代～桃山時代初期）、家型墓石（桃山時代）、舟形墓石（元禄時代～江戸時代末期）という年代のものがあ、とくに鎌倉時代の小型五輪塔は破損甚だしく、惜しまれる。

須川の十三夜堂 諏訪形 字 須川 3054番地 91坪

須川に在住の童子が志を立て中曽根の興善寺の仏門に帰依し、修行成つての帰途寺の大和尚より「木造地藏菩薩座像」を授けられ、たび姿に身をかため、古びた「つづら」にこれを納めて背負い急いで故郷須川に帰り、自らは念仏信仰に専修していたという。ところが、この古びた「つづら」を預かった主は、これを整理しようと表に出してゴミを振るい払おうとしたら、何とその中から小判が出てきたという、びっくり仰天、たまたまこの状況をよそものが見ており、その主を殺してしまったとかー。しかし、その後の顛末はわからない。

この「一峰」は念仏信仰を説き歩き念仏講などを開いて人心をつかみ、十三夜堂創建にあたり、堂主として迎えられたのでわなかろうか。このお堂を村の人々は「さんやさま」と呼んでいる。

十三夜・十五夜・十七夜・十九夜・二十三夜と、この語源は講の人が集まって飲食しながら月の出を待つ行事で、とくに江戸時代には二十三夜の三夜待といって徹夜することもあったという。このことから庚申信仰とも結びつき、さらには念仏講や蚕神になったり、地域の相違や時の流れによって変わって受けとめられている。

一世「徳岸一峰」は宝暦4年甲戌年（1754）8月5日に歿しているが、その死亡年齢は不明である。墓石をみると三世は二世より3年早く歿している。四世は文政3年庚辰年（1820）11月25日寂となっており、以後絶家となっている。その間約80～90年のあいだこの地で布教に努めていたと思われる。

現在、須川の南斜面の丘上に丸型墓石4体が並列しており、何か集落の人々の安泰を見守っているかのように思われる。

二世	見外裁松庵主	永楽4乙未年（1775）	12月15日
一世	徳岸一峰	宝暦4甲戌年（1754）	8月6日
三世	紫峰海雲庵主	明和9生辰年（1772）	10月5日
四世	昭運社切誉海圓恵明老和尚位	文政3庚辰年（1820）	11月25日

・明治8年の後年が明治10年となっている理由は不明

・この観音堂についての記述は重要。『宝永の差出帳』にある「観音堂」は金窓寺をさすのではないかという説もあるが、この記述が正しいければ全く別な堂宇が存在したことになる。また、堂村に「経堂」と呼ばれたお宅があるが、観音堂（附属）の経蔵とみることができる。

・「人が」の誤りか？

木造地藏菩薩座像は座高およそ50cm位で桧材の寄木造とか、像容は美しさを感じるが、残念なことに両腕はもぎとられ、眉の水晶？も紛失跡根のみ、彩色も褪せて素地となっている。また、早魃の年にわこの地藏様に須川の池の水をかけて雨乞祭をしたとか。そして、佐久市大字根々井正法寺の県宝「木造地藏菩薩半跏像」に類似しているというが、確かに上半身の容貌はやや似ているかのようであるが、彫成や着衣が異なり半跏の姿勢である。

現存する堂屋は奥の間10畳、茶の間8畳に仏壇、そして勝手付きという構造であるが、廃堂後は寺子屋として勉学場となり、また、村人の集会の場ともなったため奥の10畳の間は増築したものだという。

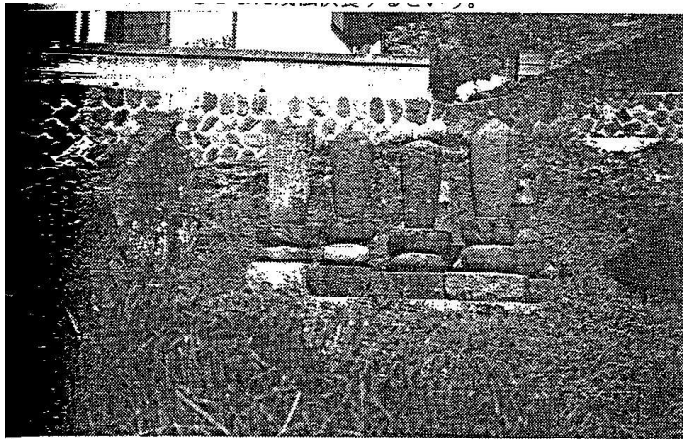
元治元甲子年（1864）お堂の入口に墓石と並んで「筆塚」が建立されている。このことは寺子屋の存在を物語るもので、明治維新に廃藩となるや上田藩の侍者、依田村の高瀬氏を先生として迎えた時期もあり、大正時代は夜学会とも称した。

平成7年須川公民館改築に当たり新しく仏間を造り、そこに今まで堂屋にあった仏壇をそのまま移して供養している。

須川の念仏講

戦前までは「さんやさま」を中心に春の彼岸の中日に、一家の主婦がお堂に集まって別紙念仏経を順序にしたがって、鐘を音頭に108個の数珠玉を念仏を唱え拝みながら次へ回すのだという。この行事が終わると、それぞれの手作り料理が披露されて飲食会が始まり、当時の農村婦人としては唯一の触れ合いの場でもあり、楽しみの場でもあったようである。

最近、良き指導者も既に亡く、今では小グループ4～5人で彼岸の中日に念仏行事を行っている。葬式などの場合その当夜、南無阿弥陀仏七遍返、地藏七遍唱、三十日数唄、死亡仏之日唱などをとなえ成仏供養するという。



道祖神 諏訪形 字 石田 1219番地

この付近ではどこの集落へ行っても路傍に道祖神が祀られている。もともとは村の境や峠にあって悪疫を防ぎ旅立つ者の安全を守り、また縁結びのことなどをつかさどる神で、これがだんだん信仰が進み集落の路傍に80cm～1m前後の楕円形の自然石に道祖神と銘記されて、かす多く祀られるようになった。

道祖神に猿田彦大神を祀ることは、日本神話の中に出てくる神々の先導をつとめたことからだろう。さらに境の地点は古くから若き男女交歓の場ともなったことから転じて縁結びの神となり、それがもとで子授けの神、子供を守る神などともなった。

諏訪形地区に現存している道祖神は、諏訪形6体、中村2体、須川1体、朝日ヶ丘1体で、その内諏訪形・中村・朝日ヶ丘の各1体は昭和の末期に建てられたもので、その他のものは年代不明である。

諏訪形中村地区では1月15日に正月飾り（おしめ）や子供の書き初めを道祖神の前で「とんどん焼き」をする。その炎で、前日豊作を祈って餅粉で作った「まゆ玉や稲の花」焼き、それを食べると1年間風邪をひかないとか、また書きそめのもえがらが高く舞い上がるほど学業成績がよくなるという風習があった。

この行事が終わると子若衆（小学生）は2月8日の道祖神のお祭りの準備にとりかかる。先ず最上級生である6年生の中から、祭りの執行責任者として「大棟梁」が選ばれる。この大棟梁を中心に小屋造りの諸材料（杭・棒・蚕簞・藁・むしろ）を持ち寄り、道祖神の前に約1間幅の奥行2間位の小屋を完成させる。

いよいよ2月7日の「よい祭り」の日は、道祖神に「きりさげ」を飾りつけ、のぼりを立て賽銭箱を備える。一般子若衆は太鼓を叩きながら「道祖神のお祭りだー」と大きな声で村中をねり歩く。そうすると、夕方から翌日午前中にかけて参拝者が参る。このとき大棟梁は小屋の一番前に座して挨拶を交わし、甘茶を振舞って猿田彦大神のお札を差上げる。とくに幼児のある家庭では、わら馬に「つとっこ」に入れた餅をつけて道祖神にお供えしたりその餅を交換したりした。そして、わら馬を大屋根にほうり投げて、わが子がすくすくと育つよう祈つたものである。また、長男の生れた家庭では金品を奉納する習わしになっていたとか。

- ・「つ」は原文のまま
- ・「生れた」は原文のまま

この行事も戦後一時途絶えたが、最近青少年育成会の指導によって再興したが簡略化されている。

庚申塔 諏訪形 字 石田 1219番地

十干、十二支（えと）の組合わせで、60日ごとにやってくる庚申（かのえ・さる）は中国からの外来信仰で、この晩には「三尸（さんし）の虫が体内からぬけて天に上り神に人の悪事を告げる」ということから、徹夜で翌朝の日の出を待つと云って、身を慎んで神を迎えおこもりをする古くからの日待行事であったと云う。

- ・「十干、十二支」の「、」は不要と思われる
- ・「組合わせ」は原文のまま

この信仰は江戸末期に普及したもので、土地によってその信仰も様々に変化している。例へば村の入口に庚申塔を建立して盗賊よけ、或いは庚申講によって通りすがりのならずもの自衛のための機関であったり、また道祖神信仰とも結びつき猿田彦大神の掛軸を飾ってお日待ちなどをした。このように、供養のしるしに建てたものが、大方の行事もすたれた今日村のはずれに庚申塔としてのこっている。

- ・「へ」は原文のまま

中村地区にある庚申塔は、寛政7年乙卯（きのと・う）年（1795）ちょうど今から約200年前に建立されたもので、集落えの東入口にあたる字石田1219番地路傍の三叉路に道祖神と併置されている。

- ・「え」は原文のまま

そこに、胴回り1m50cm位の「エノミ」と称するご神木がある。この木を切ったり付近の石を動かすと災難があるとか、また、神のお告げの白蛇が出たという伝承もある。



山の神信仰

山の神は大山祇神を崇敬し山の仕事に従事する人々の信仰があつた。これが地方によつては、この神に弓や矢を捧げて豊作を祈ったり、中にわ繁殖の神として安産に結びつけた信仰もあるという。

*大山祇神社 諏訪形 字 須川

この神に弓や矢をあげて、月の十七日には山の神の祭をしてその日は山に行つてわいけないという風習があつた。また、豊作や安産の神でもあつたという。

これが養蚕の盛んな時代になると「お蚕さま」を守る神として崇敬されるようになった。祭日の八十八夜の5月2日、近隣近郷の養蚕農家が豊蚕祈願のための参詣者で須川へ登る4つの道は列をなすほどだったという。

そして、藁でこしらえた馬の沓を供えたり、馬や鶏の駄菓子を買ひ求めて豊蚕を祈念したものである。また、神社境内は出店や出物それに参詣者は酒宴をはるし、賑やかであつた。

*上の山の神—県道須川線舟窪古墳群えの入口左側に小さな石祠がある。

- ・「え」は原文のまま

*下の山の神—悠生寮・タタラ塚古墳の上の山道を登った尾根上に石祠がある。

*大富士の山の神―大富士山中に石祠が祀られている。

これらは何れも、当時の人々が願いをこめて祀ったであろうが、いまでわ山の中にささやかな祠として、形ばかりが残っている。

(大山祇神社と下の山の神の写真)

須川の池伝説

上田市街地から南へ4 kmばかり、小牧山の頂に須川という30戸あまりの集落がある。そこに、承応3年(1654)から明暦3年(1657)にかけて上田藩主仙谷氏が気付いた気づいた築いた周囲20町有余の溜池がある。この池の水は湖底からの湧水と雨水が主であるが、不思議なことにどんなひどくても乾いたことがないという。そして、池の半分は御天領地(依田村尾根山)であったため、放水の時わ天領地が優先されたとか。

また、池の主は鏡の化身の竜であるという伝承がある。

<口頭伝説>

昔神川村に国分寺があった時分、この寺の釣鐘を盗みだして、小牧山あたりに来かけた盗賊があった。だいぶ疲れたので釣鐘を小牧山まで運ぶと、まずそこで一休みしていた。すると不思議にも、今持って来た釣鐘がざとりでに張り鳴りだしたのである。「国分寺磊や恋いしや、ぼぼぼーぼうんう」盗賊が驚いて見ているうちに、釣鐘はたちまち動き出して勝手に須川の池の中へころがり込んでしまうので、たまたまこの池に落ち込む者で「国分寺へ行くんだ助けてくれ」というと、今でも落ち込んだままの国分寺の鐘は、おぼれ死のうとしている人を助けてくれたということである。
(日本伝説叢書 信濃の巻)

昭和28年2月、第21回全日本スピードスケート選手権大会が開かれるなど、上田近在の子供達も下駄スケートでよく滑ったものであるが、地球温暖化の影響か、現在ほとんど結氷しない。

7小菅訓導碑

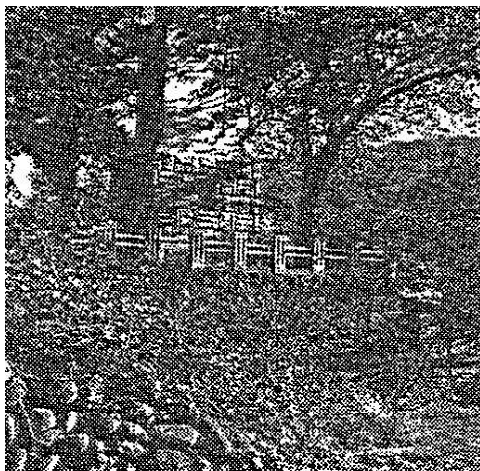
上田尋常高等小学校高等科(現在上田第二中学校)一年生250名の春の遠足帰途の遭難事故で、その経過については説明板で示されている。当時この崇高な犠牲的精神を崇えるため映画化され、近隣の小学生・高等科生は学校で引率して電気館に見に来たものである。

<小菅訓導殉職記念碑説明板から>

この殉職記念碑は今からおよそ60年前おぼれる子供を救おうとして、千曲川で殉職された小菅武夫先生の崇高な好意を称え、その道徳を永久に記念するために県内外の有志の方々からの募金によって建立されたものであります。

昭和4年4月24日、当時の上田尋常高等小学校本校部の春の遠足で250名が須川・鴻の巣方面に出かけた帰り、一人の子供が千曲川の仮設橋を渡ろうとして足を踏みはずし川に転落しました。それを見て小菅先生は服を脱がずに直ちに渦まき川に飛びこんでその子供を助け、一緒にいた先生に手渡しました。しかし小菅先生は疲れと4月の雪解け水の冷たさのため体の自由を失い、ついに殉職したのであります。時に先生は23才、教職について25日のことあります。

昭和63年11月19日 上田市教育委員会



遺跡からみた諏訪形古代歴史のあらまし

上田・小県地方に人々が住むようになったのは、今からおよそ2万年ぐらい前だといわれている。これらの人々の生活したあとが、和田峠周辺や菅平高原などから、当時の生活用具であった石器類が数多く発見されている。これらの地は、標高およそ1000～1500mの高冷地で厳しい自然環境の中で、狩猟と採集を中心とする洞窟と移動の生活を送っていたであろうことが想像される。

1 諏訪形に人が住みつく（縄文時代）

長い長い狩猟と採集の原始時代も、その進歩もゆるやかではあるが発展しつつあった。今まで山谷に生活していた人達も、より安定した生活を求めて、河川沿いの台地に地面を掘って造った竪穴式住居に住むようになり、近親者共同体を形成して生活していたであろう。

そして、この時代になって始めて土器というものが考え出され、その土器によって食物の煮炊きができるようになった。また、弓や矢の使用によって狩りの技術も発達して人々の生活もだんだん豊かになってきた。

・「始めて」は原文のまま

この頃になると、上田盆地の河川沿いの台地などに数多くの縄文文化の足跡が認められるようになり、これらの遺跡からさまざまな土器類・石器類・耳飾り・土偶・信仰用具が出土するようになった。

千曲川南岸にも上田原台地を中心に、この時代前期（紀元前3500～3000年頃）および中期（紀元前2500年頃）の遺跡が発見されている。

昭和54年ごろ、諏訪形の県営水道の敷地付近の地籍を、県・市合同調査を実施したところ、縄文中期の加曾利E式土器の破片が発見、遺物包蔵地であることが認定され、洪取田・中堰遺跡として登録された。（県の所見、登録番号95）

この時代の生活遺物が発見されたということは重要な意味をもち、今から4～5千年前に既に諏訪形にも人が住んでいたと解するべきである。

それでは、これら諏訪形縄文人はどのような生活を営んでいたであろうか。衆目の歴史的ロマンを覚えるところである。

古代の千曲川はどのように流れていたかは定かではないが、この地は今の千曲川の川底から10mほど高台に位置し、背後には小牧山塊を控えて獣（シカ・イノシシ）の狩猟、果実（クルミ・クリ・ドングリ）の採集、秋には千曲川をさかのぼる（さけ・ます）の漁労にあげ暮れて生活の糧を得、竪穴住居に近親者共同体の生活を送っていたであろうことが想像される。

2 稲作のはじまり（弥生時代）

弥生時代の特徴は金属器をともなう稲作農耕の普及である。この技術は中国から朝鮮半島を経由して北九州にはじまり、信濃に入ってきたのは東海地方から天竜川をさかのぼって中期ごろから『米作り』が伝播された。しかし、中期の遺跡はあまり確認されていないが、後期になると飛躍的に発展して天竜川や千曲川に面した微高地上にその遺跡が激増した。

上田盆地もこの時期になると、遺跡数も驚異的に増加している。その分布の中心は千曲川兩岸の自然堤防上あるいは神川沿い、産川流域の微高地上にその密度は高い。

さて、城下地区に転ずると、地勢は千曲川の南岸に位置し、小牧山塊にはさまれた東端の小牧地区を基部として、諏訪形・御所・中之条・下之条と扇状に展開している沖積氾濫原地帯と、上田原台地を中心とする塩田の産川沿いに、この時代の遺跡が数多く分布している。このことは、この地帯に稲づくりをしていた人々が生活していたことを物語るものである。

これらの人々は、今まで長い間つづいていた狩猟と採集生活から、水田耕作に適した沖積平野の低湿地に隣接した自然堤防上に生活するようになった。

3 古墳時代

古墳の出現

弥生時代の末期になると、人々の住む居住の場と死後を送る墓地は別れるようになった。これが古墳時代の始まりである。

日本で最古といわれる、奈良県箸墓古墳（墳丘長276m）や京都府大塚山古墳（墳丘長185m）は3世紀後半に造られた前方後円墳で、これによって、弥生時代から

古墳時代に移行したと考えられている。とくに、大阪府大仙陵古墳（墳丘長486m）は仁徳天皇陵で日本最大のものであるといわれている。

信濃で最古といわれている古墳は4世紀後半から5世紀前半に出現した前方後円墳の更埴市森将軍塚（墳丘長100m）長野市川柳将軍塚（墳丘長93m）および方墳の松本市弘法山古墳（墳丘長66m）が代表であるといわれ、いずれも竪穴式石室をもっている。

・更埴市は現千曲市

この時代上田盆地の状況はどうであったろうか。弥生時代の農耕文化を経て、古墳時代に入ってからの上田市管内の遺跡は古墳の前面や周辺に濃密に分布し、土師器（はじき）を出土した遺跡は336ヶ所、須恵器（すえき）を出土した遺跡は261ヶ所、古墳が211基となっている。（表面採集による埋蔵文化財分布調査報告書）

上田市管内の古墳で4世紀後半ごろに築造されたといわれる「方墳」の秋和大蔵京古墳（墳丘長32m）西塩田新町の王子塚古墳（墳丘長50.8m）および秋葉裏二子塚古墳（墳丘長49.5m）はいずれも「前方後円墳」で5世紀から6世紀にかけて築造されたものだといわれ、墳形ならびに規模からして、上田地方の代表的な古墳であるといわれている。

・「墳形」は「墳形」の誤りと思われる

諏訪形地区の遺跡と古墳

地勢では千曲川の南岸に位置し千曲川と小牧山にはさまれた、上田原台地を中心とした下之条・中之条・御所・諏訪形・小牧の沖積氾濫原地帯で、この地は、弥生時代から古墳時代にかけて数多くの遺跡（遺物包蔵地）が分布している。

このことは、水田耕作に適した沖積平野内の低湿地に隣接した自然堤防上に集落を形成して生活するようになり、この地帯は生活圏も同じであったと思える。稲作経営をするうえで共同作業的要素が多分にあって、たとえば新しく水田をつくったり池や堰を造るにしても多くの人の協力が必要となってくる。また、水害などのときはみんなで力を合わせなければ水には勝てない。そこで人々は集団で協力し合うようになり、その中で力のあるものが指導者となり支配者となった。こうして生まれた支配者の治める一定の地域が、地方区域で最も古い呼び方の『すわの国（あがた・諏訪形）』であったと思う。

諏訪形の祖先も最初は山裾に住んでいたであろうが、米を作るようになると水が必要となり、だんだん下へ降りてきて、ほかの場所よりやや高い自然堤防上に住むようになった。この場所が中沢遺跡であり、高町遺跡である。

中沢遺跡は、昭和37年1月住宅新築のため井戸を掘ったところ、地下5mのところから中期から後期の土師器（高杯・脚台付甕・小型壺・その他）および後期の須恵器が出土した。

この地点は、縄文時代の渋取田・中堰遺跡の地帯と同じで、須川の押し出しによって形成された扇状地の先端にあたる。ここで注目すべきことは地下5mのところからほぼ完全と思われる土器が発掘されたということは、今から1300～1400年前にはこの地下5mの位置が地表であって、長い年月の間に埋没したのでわなかろうか。

これら集落（かたまり）の頭目や豪族が死亡すると、自分が住んでいたところより高い山の麓の、しかも今まで支配していたところを一望できる処に墓を造り、子孫の繁栄を見守っていたであろう。それが次第に力のある農民にも及び群衆墳になったのだといわれている。これらはいずれも墳丘長7～15mの6～7世紀頃の横穴式小円墳で、小牧山の山麓に古墳として散在している。

諏訪形の古墳一覧表

番号	古墳名	型 式	墳丘高	現 状	出土品	所在地
104	タタラ塚	横穴式円墳	14.0	ほぼ完全		諏訪形字東山2349
105	舟窪第一号	古墳群	9.8	半壊	s49 勾玉 切子玉	諏訪形字扇平国有林
106	// 第二号		13.2	//	s50 北宋銭 石●	諏訪形字扇平194
107	// 第三号		—	//		諏訪形字扇平
108	// 第四号		15.2	//		諏訪形字扇平
109	// 第五号		12.7	//		諏訪形字扇平1501
110	森ノ木一号	//		全壊	t15 直刀 銅環 はみか？	諏訪形字森ノ木
111	// 二号	//		不明		諏訪形字西夏目口
112	上ノ平	//	7.2	ほぼ完全	s50 勾玉 白玉 小玉 刀子 金環 若子	諏訪形字中ノ平

註 番号は市の登録番号である。森ノ木二号は天上石だけが見えるが、石室その他は不明。出土品欄のs49などわ発掘年次を示す。

＊タタラ塚古墳 昭和63年市指定史跡
「タタラ」という語源は鍛冶工場の送風装置「ファイゴ」の風の出口のことで、この地名は製鉄の工場や職業の人が住んでいたところが多いといわれている。また、積石塚ではないかとも考察されている。だとすれば帰化人の墓である可能性もある。

＊舟窪古墳群 昭和60年市指定史跡
舟窪の南斜面の中腹のところの標高650～700m付近に5基の古墳が東西稜線に向かって15～30m間隔で整列している。これを舟窪古墳群という。2ヶ年にわたって発掘調査の結果、その副葬品は勾玉、切子玉それに土師器・須恵器の破片その他若干が出土した。検出された遺物はいかにも貧弱な遺物の出土状態であった。（発掘者の所見）

＊森ノ木一号古墳
この古墳から1m近い上小地方最長の直刀および馬具残欠（はみか？）が発掘されたことわ、この地方の豪族の墓であろうか。

＊上ノ平古墳
発掘調査の結果、石室内は小石によって覆われている関係から、いわゆる積石式古墳ではないかと推定される。もし積石式古墳であるとすれば、帰化人によって営まれたことになる。（発掘者の所見）
註：発掘調査の状況その他詳細についてわ「古代諏訪形地区の歴史」参照

4 須波（すわ）郷における家族制度の推進

大化の改新（646）を契機に国府が創設されてから、その地方制度も「国・郡・里・戸」制から「国・郡・郷・里」制、さらに天平12年（740）ごろには「国・郡・郷」制に移り変わった。これが長く地方制度として続いた。

平安初期に成立した和名抄（百科事典）には、この「国・郡・郷」の名が集録されているが、これによると信濃国は郡10、郷87とあり、小県郡には8郷があったと記載されている。またこの郷は50戸から編成されていたという。

小県郡の8郷
須波（すわ）郷は上田市千曲川南岸の小牧・諏訪形・御所・中之条と諏訪部・塩尻秋和・常磐城・中央市街地を推定している。ほかに、童女（おうな）・山家（やまが）・跡部（あとべ）・安宗（あそ）・福田（ふくだ）・海部（あまべ）・余戸（あまりべ）の7郷があった。

それでは「国・郡・郷・里」制時代の正倉院御物に保存されている古代の戸籍簿によると、郷は三つの里からなり、郷の総戸数は130戸である。これは竪穴住居の棟数であって現在の家族単位をさし、これを房戸と呼んでいる。ここで注目すべきは欄を変えて戸数50と明記してあることである。

・大化の改新って645年と教わったような？

当時の家統制度は、父系または母系による血縁集団であって、その血縁者2～3の戸がよって生活単位を形成していたのでなかろうか。これが郷戸といわれるもので徴税・徴兵・班田の基礎となったのだと思う。この資料によって、当時の須波郷の家族制度ならびに生活実態がほぼうかがえ知ることができる。

- ・「家統制度」は原文のまま
- ・「うかがえ知る」は原文のまま

このように朝廷の律令国家体制も固まり民政も安定しつつあった平安時代の初期仁和4年（888）信濃国に大災害が起こった。これが「仁和の大水害」で、千曲川沿岸一帯が大こう水にみまわれ「地形が一変し人馬多数流される」と記録されている。千曲川南岸に位置する諏訪形をはじめ小牧・中之条・下之条一帯は激流にのまれ海面と化し、この惨状は原語に絶するものがあつたと思われる。

- ・『諏訪形誌』第1章自然でも触れた北ハヶ岳の山体崩壊による洪水

ここで想起するに、小牧集落の一部地積が千曲川を越えて上田城の崖下に及んでいる事実である。しかし、この大水害との因果関係は定かでない。

- ・「地積」は原文のまま

このように、われわれ先祖は千曲川の氾濫という宿命を背負い「水との戦い」に幾度となく遭遇し、血生ぐさい悩みと苦しみ連続に絶えてきた。いまわ完全な堤防ができ、毎日平安な生活が送られていることを心しなければならぬと思う。

- ・「絶えてきた」は「耐えてきた」の誤りか？

5 諏訪形の條理的遺構

古代の土地制度に「条里制」というものがあつた。まず耕地を6町（654m）を縦横に区切って横（東西）の列を「条」縦（南北）の列を「里」と呼んだことから起こったものである。この方6町を1町（109m）間隔で縦横に区切ると1辺が1町の正方形（面積11881㎡）が36できることになる。この1区画をそれぞれ坪と称した。この坪をさらに10区画に分けられるが、縦長に10等分されたものを長地形といい、中央で2分してそれを各筋に分けると半折形になる。いずれも1区画は1188㎡で現在の呼称よりやや大きい。

- ・「條理的」は「条理的」か？

このように大規模な土地割をしたのは「班田収受」の制度が実施され、6才以上のものに口分田（男子600坪、女子400坪）として土地を与えるためのものではなかったかといわれている。

上田市管内には、染谷台一帯を始め塩田平・秋和・千曲川南岸一帯に条理地割りのあることが早くから知られていた。そこで上田市では昭和47年から同50年の足かけ4年にわたって実地調査をすることになり、その調査結果報告書28頁の（a）御所及び諏訪形地区の項に大字御所の南部の別所線の軌道敷の南方を実測すると、上満丁は109.6m、中満丁は106m、下満丁は111.5mでやはり平均すると109mで標準的な坪の間隔となっている。

また諏訪形地区の場合は、字下田の東方の字梅原・枅尻・砂田等はほぼ1町方格の3坪が東西に連結されている。（c）坪区画の変形についての項には、諏訪形の字二反田及び柳田の坪区画は北東部が欠けている。この資料により諏訪形地区について、現場確認と歩測による調査を試みた結果、道路などの拡幅により区画がはっきりせず、ために標準より小さい。

梅原 縦92m 横92m ほとんどが住宅となっている。

枅尻 縦90m 横85m ほとんどが城下小学校の敷地。

砂田 縦86m 横83m ほとんどが住宅で一部小学校敷地。

なお、諏訪形二反田の坪区画の変形も確認できた。いずれにしても、今から約1000年前にこれだけの大事業を成し遂げた古代の人々に対し、ただただ敬服するのみである。

<註>この記録は、平成5年発表の『古代諏訪形地区の歴史』より抜粋要約したものである。

むすび

この諏訪形で生まれ育った人はもちろん、他地域から来た人や子供達が、郷土の歴史をよりよく知り、これに愛着と誇りをもつことは次の世代を担い発展させていくうえで大きな活力となると思います。

村内を歩いていても、神社仏閣や路傍に苔むした古い石塔があれば、それには必ず地域にまつわる歴史が秘められている筈であり、これに関心をもつことによって愛着を感じ親しみを感じさせ、これが故郷を掘り起こすことにもつながると思う。

地域内同志によって、諏訪形の古代遺跡・遺構・古墳などについて現地調査をした結果を取纏め、平成五年に『古代諏訪形地区の歴史』で発表してあります。

ところが、会員の高齢化や故障者その他の事情によって、地区内の神社仏閣や文化財などについて、調査聞き取りをしたまま現在未稿となっております。

たまたま、会員やその他の一部から折角調査したものであるから何とか纏めてみてわどうかという要請があり、不肖私も、その責任の一端を感じ、散在している調査資料を駆使しながら、一部の人の協力を得ながら個人的に取り纏めた次第です。

もとより浅学非才、この纏めた資料の不十分さや不正確さは多々あると思いますが、何かの参考資料にともなれば幸いです。

平成9年12月

文責 金子 素人